

# 立ち上げ期におけるライティング支援組織のマネジメント

## —青山学院大学アカデミックライティングセンターを事例に—

小林至道\*, 小林佳織\*\*, 本田裕暉\*\*, 武居辰幸\*\*, 立原遼平\*\*, 小林絹\*\*\*, 中竹真依子\*

\*青山学院大学アカデミックライティングセンター

\*\*青山学院大学大学院文学研究科

\*\*\*青山学院大学大学院教育人間科学研究科

### 問題の所在と本発表の目的

近年、授業外におけるライティング支援が、新たな組織設置の機運をともない、広まりつつある。一方で、そうした支援組織の立ち上げから軌道に乗せるまでに、どのようなマネジメントが必要になってくるのかという観点からの実践事例および研究の蓄積は、十分とは言えない状況にある。ライティング支援の理念と実践（佐渡島・太田2013）のはざま、実際に授業外におけるライティング支援をマネジメントしていくとなると、どのような問題点に直面していくことになるのか。そして、そのような問題点にどのように対処しながら、支援組織を構築していく必要があるのか。

本発表では、とくに立ち上げ期のマネジメントについて、青山学院大学アカデミックライティングセンターを事例として取り上げ、報告する。

### ライティング支援組織の運営に必要なリソース

授業外でライティング支援を組織的に行う場合、どのようなリソース（人的・物的資源）が必要になるのか。実際には、1) 支援者、2) 運営・管理者、3) 運営資金、4) 場所の4点は、最低限必要だと考えられる。紙幅の都合もあり、本稿では、1) と 2) を中心に論点を整理する。

利用者の相談対応を直接的に担う支援者には、レポート・論文などの書き方に関する知識・経験、利用者がより良い文章を書けるようになるために伝え、教えるスキルとテクニックが求められる。国内の先行事例を概観すると、大学院生が担うのが一般的だが、教職員、学部生が担うケースも見られる。本学ではライティング支援の専門家である教員が実施するトレーニングを受けた大学院生（修士・博士合わせて20名）が担っている。

運営・管理者とは、支援現場のマネジメントを担う立場を指す。国内の先行事例を概観すると、教職員が本来の業務と兼務、プレーイングマネー

ジャーとして支援者と兼務するケースが主流である。本学では、専任教員が2名、職員が1名、支援現場に常駐する体制で運営を行っている。

### 円滑な運営を展開するうえで考慮すべき点

まず何より強調したいのは、中島・鹿島(2016)が先鋭的に指摘するとおり、ライティング支援のマネジメントに専念できるポストを設ける必要性である(p.113)。たしかに、予算や人材の確保などの問題もあるため、「なぜそのようなポストが必要なのか」、「兼務でも十分にやっつけられるか」という認識や意思決定があるのかもしれない。しかし、支援現場の実態をつぶさに把握・分析し、それを踏まえて現場を牽引・統括する人間がいないと、支援組織は、遅かれ早かれ立ちゆかなくなってしまうだろう点は述べておきたい。

では、実際には、どのような点をマネジメントする必要性が生じてくるのか。それは、利用者のニーズと実態についてデータを通して踏まえつつ、「どこからどこまでを支援するところなのか」を明確にしていくという点である。とくに立ち上げ期は、蓋を開けてみると利用者が持ち寄る相談内容が、支援する側の想定範囲を超えがちになる。そのため、支援対象者、支援対象物、支援内容などは、立ち上げ当初は限定的にして、広報活動ないし受け入れ体制の整備を進める必要がある。

### 参考文献

中島梓, 鹿島萌子 (2016) 「立命館大学におけるライティング・サポート・デスクの理念と実践—チューターの立場から振り返って—」『立命館高等教育研究』第16号、立命館大学教育開発推進機構、pp.101-116

佐渡島紗織, 太田裕子 (2013) 『文章チュータリングの理念と実践 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房